

刊行の辞

1200年の歴史を有する四国遍路は、今もなお多くの人々を四国へ誘い、地域の人々もお接待で迎える、生きた四国の文化です。

本センターは、四国遍路の歴史や現代の実態を解明し、世界各地の巡礼との国際比較研究を行うことを目的として、2015年法文学部附属として設立され、2019年には社会連携推進機構のもとで全学センターとなりました。地域との連携をいっそう深めるために、2020年1月には、四国4県を中心とする四国遍路世界遺産登録推進協議会の「普遍的価値の証明」部会と協力協定を結んでいます。

2020年からは、科学研究費基盤研究(B)「霊場資料学の構築と霊場文化の解明による四国遍路の総合的研究」(研究代表者：胡光)を獲得し、新たな研究を始めました。ところが、新型コロナウイルス感染症の影響により、学外での霊場調査が中止され、例年行っている公開講演会・研究集會も、関係者のみの会場参加とオンラインによる開催を余儀なくされていました。このような厳しい社会情勢を経て、ようやく本年度は学外の調査も再開し、10月29日に公開講演会・シンポジウムを、感染防止対策を十分とったうえで、参加制限を設けずに開催しました。オンラインを併用したため、東京や北海道、台湾からの参加もあり、関心の高さを再確認しました。開催にあたり、ご協力いただいた関係各位には深く御礼申し上げます。

同会は協力協定を結んだ世界遺産登録推進協議会と協議の上、「比較巡礼論」をテーマに開催し、会場の皆様とともに議論を深めました。講演では、埼玉県立大学の浅川泰宏准教授(文化人類学)が、四国八十八ヶ所霊場にはあるが、他の霊場ではあまり見かけない「杖立」について語りました。巡礼者が自前の杖を用いる風景は、四国ではあたりまえで、常に弘法大師とともにある「同行二人」の文字が刻まれた金剛杖はお大師様の化身とされ、大切に扱う風習があります。ただし、杖立が奉納され広がり始めるのは、1980年代末ころだといえます。杖立は、弘法大師への現代的な敬意が具現化したもので、四国発の巡礼文化ではないかと述べられました。逆に、四国で衰退した巡礼文化として、壁に納札を貼る行為があるとされます。今でも、山形県の最上や置賜の観音霊場では観音堂の壁一面に納札が貼られています。現在四国では、納札入に入れますが、かつては、柱や壁に貼っていて、1980年には箱に入れるのをゴミ箱のようでいやだという感想が記録されています。感覚の変化とともに、巡礼文化が生き続けているのです。

報告者の一人、愛媛県歴史文化博物館の大本敬久専門学芸員(民俗学)は、四国遍路の世界遺産化活動に触れ、四国遍路が生きた文化であることを述べました。特に、接待に注目し、島四国では家族ぐるみの付き合いが続いたり、遍路道近隣以外の地域でも、遍路墓や茶堂・大師堂など、遍路文化が四国に根付いていることを指摘しています。遍路文化は、写し霊場という形で全国に広がります。元滋賀県立大学教授の近藤隆二郎氏(環境工学)は、写し霊場の空間論を展開、本霊場の歩くリズムを写し、縮小させる日本文化の特徴に触れています。スペイン・サンティアゴ巡礼と熊野詣を経験された静岡大学の大原志麻教授(西洋史)は、両者の歴史の中での王権の関りを述べるとともに、現在では脱宗教的な私事化の進行を指摘し、巡礼と観光の融合についてコメントされました。

全ての報告を拝聴して、人はなぜ歩くのかについて考えました。巡礼の原点である「歩く」ことの象徴が「杖」だと思うのです。本誌に収録した同会の内容は「比較巡礼論」の入口です。多くの巡礼と比較することで、四国遍路の特徴が見えてきて、世界遺産化のために必要な「普遍的価値の証明」にもつながります。7月には、四国遍路をとりまく多様な巡礼の在り方を多彩な視点で分かりやすく紹介した新書『四国遍路と世界の巡礼—最新研究にふれる八十八話—』を地元の創風社出版から刊行しました。愛媛大学基金を活用し刊行した本書は、愛媛県内で高い評価を受けて、本年1月には、愛媛出版文化賞部門賞を受賞しました。受賞をきっかけに、多くの方に手に取っていただき、四国の文化に親しんでいただければ幸いです。

末筆ながら、今後とも本センターへの御支援・御協力をお願いいたします。

愛媛大学 四国遍路・世界の巡礼研究センター長

えべす
胡 光